厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

高次脳機能障害の障害特性に応じた支援者養成研修カリキュラム案作成

研究分担者：今橋久美子　国立障害者リハビリテーションセンター　主任研究官

研究要旨
高次脳機能障害者が住み慣れた地域で生活するためには、障害の特性を理解し、適切に対応できる支援者を増やすことが喫緊の課題であり、そのためには、支援者養成研修の充実が不可欠である。本研究では、既存の養成研修（強度行動障害、介護職員初任者、移動介護従事者、サービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者）の実施要項を収集し、受講対象、受講要件、時間、講義・演習内容等を比較した。また比較結果に基づいて、班会議において、支援拠点機関、行政、当事者団体等と意見交換を行い、基礎編と応用編、各 12 時間（6 時間×2 日間）のカリキュラム案を作成した。

研究分担者
立石雅子：日本言語聴覚士協会　副会長
青木美和子：札幌国際大学　教授
上田敬太：京都大学　講師
渡邉修：東京慈恵会医科大学　教授
鈴木匡子：東北大学　教授
廣瀬綾奈：千葉県千葉リハビリテーションセンター　科長
浦上裕子：国立障害者リハビリテーションセンター　リハビリテーション部長
研究協力者
片岡保憲：脳損傷友の会高知青い空　理事長
古謝由美：日本高次脳機能障害友の会　監事
守矢亜由美：東京都心身障害者福祉センター　高次脳機能障害者支援担当
鈴木智敦：名古屋市総合リハビリテーションセンター　副センター長
瀧澤学：神奈川県総合リハビリテーションセンター　総括主査
佐宗めぐみ：相談支援「楽翔」管理者
小西川梨紗：滋賀県高次脳機能障害支援センター　臨床心理士
コワリック優華：滋賀県高次脳機能障害支援センター　看護師

A．研究目的

高次脳機能障害の支援については、障害福祉制度の整備は進んだが、現場の支援者には未経験な者も多く、同障害の特性に応じた支援が十分行われているとは言えない。高次脳機能障害者が住み慣れた地域で生活するためには、障害の特性を理解し、適切に対応できる支援者を増やすことが喫緊の課題であり、そのためには、支援者養成研修の充実が不可欠である。

本研究では、高次脳機能障害者に対する支援者養成研修テキストの基盤となるカリキュラム案の作成を目的とした。

B．研究方法

既存の養成研修（強度行動障害、介護職員初任者、移動介護従事者、サービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者）の実施要項を収集し、受講対象、受講要件、時

間、講義・演習内容等を比較した。また比較結果に基づいて、班会議において支援拠点機関、行政、当事者団体等と意見交換を行い、カリキュラム案を作成した。

（倫理面への配慮）
文献調査のため倫理審査対象外。

C．研究結果
各養成研修の比較表を示した（表 1）。これに基づいて、班会議において下記の点を検討した。

【障害特性の理解について】
- 障害の「代償手段」の獲得、利用についても触れてほしい。
- 「コミュニケーション」も講義に入れてはどうか。
- 「構造化」が必要とされる場面は少なくないとは思うが、研修の項目名等に「構造化」という用語を用いるにはやや違和感がある。タイトルとしては「構造化」→「環境調整」とするか、「構造化」の用語については本文内で用いる、あるいは項目として立てるのでは無く「支援の基本的な枠組み」で述べてはどうか。
- 自閉症（ASD）の「構造化」よりも、個々の事例の症状や特性及び社会的背景を踏まえた柔軟な構造化という考え方が重要ではないか。

【アセスメントについて】
- 自己理解の状況（自己意識性＋防衛機制）も踏まえたアセスメントが重要であることに触れてほしい。
- 支援の基本的な枠組みに関して、支援コーディネーター関連やサービス等利用計画、個別支援計画について支援プロセスの流れで説明してはどうか。
- 中途障害なので、生活歴や社会経験等も把握する必要がある。

【支援について】
- 外出場面における支援では、自立訓練の実践を通した説明及び在宅支援での対応方法を示してはどうか。
- 就労場面における支援では、就労支援の実践を通した説明及び就労現場での対応方法を示してはどうか。
- 「地域生活への移行及び地域生活継続のための支援」と「家族支援」について触れてほしい。家族支援については「障害と家族の生活の理解」で扱うのか。
- 家族の関係性（親－子、夫－妻等）により、その想い（受け止め方、その内容等）が異なることに留意が必要ではないか。
- ピア（同じ高次脳機能障害者）による支援についても触れてほしい。
- 支援コーディネーターとの連携を含めたチーム作りを含めてはどうか。

【演習・事例について】
- 演習に神経心理学的検査を使った疑似体験を取り入れてはどうか。
- 演習に行動障害のある事例紹介も含めたロールプレイを取り入れてはどうか。
- 架空事例は「小児期発症の成人例」と「成人期の発症例」の両方があると良い。可能であれば「復職支援」についても触れてほしい。
- 基礎と実践では事例の難易度を変える。

上記の点を改善し、基礎編と応用編、各

12 時間（6 時間×2 日間）のカリキュラム案を作成した（表 2-1. 表 2-2）。

D．考察

本研究では、既存の養成研修の実施要項を参考に、高次脳機能障害の障害特性に応じた支援者養成研修カリキュラム案を作成した。基礎編・２日間で講義と演習を行う形式とした。

基礎編は幅広く高次脳機能障害の特性を周知するものと位置付け、職種を問わず広く受講可能とすることができるものとし、応用編は支援経験および基礎編の受講を受講要件とし、より実践的なものにしたいと考える。

E．結論

既存の養成研修を参考に高次脳機能障害者に対する支援者養成研修のカリキュラム案を作成した。

次年度以降に、カリキュラムとそれに基づくテキストを用いてモデル研修を試行し、内容の改善を図る。

F．健康危険情報　なし

G．研究発表　なし

H．知的財産権の出願・取得状況　なし

表１　各養成研修の比較表

	受講対象	受講要件	時間		
			講義	演習	合計
強度行動障害支援者養成研修（基礎）	障害福祉サービス事業所等において、現に強度行動障害を有する者(児)（知的障害、精神障害のある者(児)）を支援対象にした業務に従事している者若しくは今後従事する予定のある者（サービス提供責任者・サービス管理責任者・支援員・児童指導員等）、障害福祉サービス事業所等の連携医療機関等において治療に当たる医療従事者	研修の全課程に参加可能であること	6時間	6時間	12時間
強度行動障害支援者養成研修（実践）	強度行動障害支援者養成研修(基礎研修)を修了した者で、障害福祉サービス事業所等において、現に行動障害を有する者(児)（知的障害、精神障害のある者(児)）を支援対象にした業務に従事している者若しくは今後従事する予定のある者で、支援計画の作成等を担う者（サービス提供責任者・サービス管理責任者等）	研修の全課程に参加可能であること	6時間	6時間	12時間
介護職員初任者研修	訪問介護事業に従事しようとする者若しくは在宅・施設を問わず介護の業務に従事しようとする者		講義と演習を一体的に実施すること。		130時間
移動介護従事者養成研修（全身性）	移動介護に従事する者又は従事することを		12時間	4時間	16時間
移動介護従事者養成研修（視覚）			11時間	9時間	20時間
移動介護従事者養成研修（知的）			13時間	6時間	19時間
サービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者基礎研修	サービス管理責任者又は児童発達支援管理責任者として従事しようとする者であり，従事に必要な実務経験から2年引いた年数の実務経験を満たす者	1　サービス管理責任者 勤務先の代表者等の推薦を受けた者であって，サービス管理責任者として必要な実務経験を満たす者及び実務経験を満たすまでの期間が 2 年以内の者 2　児童発達支援管理責任者 勤務先の代表者等の推薦を受けた者であって，児童発達支援管理責任者として必要な実務経験を満たす者及び実務経験を満たすまでの期間が 2 年以内の者	7.5時間	7.5時間	15時間
サービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者実践研修	基礎研修修了後2年以上の実務経験がある者				約15時間

表 2 高次脳機能障害支援者養成基礎研修カリキュラム＜案＞

高次脳機能障害支援者養成研修カリキュラム＜案＞

＜基礎研修＞	◆対象：すべての障害福祉サービスの新人・若手職員 ◆研修のねらい： ・障害福祉サービスの対象となる高次脳機能障害者について知る。 ・高次脳機能障害者の障害特性を理解し、日常的な支援での対応方法を習得する。

【1日目】

形式	時間（分）	内容	担当者
講義	10	高次脳機能障害とは 1）本研修の対象となる障害 2）高次脳機能障害の定義と支援の歴史的な流れ	深津
講義	60	障害特性の理解 1）診断（典型画像と経過・症状の現れ方） 2）問診・神経心理学的評価（日常生活で気づくこと・留意すること） 3）医学的リハビリテーション（病院で行うリハビリテーション） 4）医療福祉連携（退院後のサービス利用に向けて・診断書のポイント）	鈴木（匡） 渡邊
講義	50	支援のアイデア：障害特性に基づいた支援1 1）高次脳機能障害と制度（支援の基本的な枠組み・プロセス） 2）生活と支援の実際（環境調整） 3）復職支援・就労支援	青木
演習	60	障害特性の理解と体験 「かなひろいテスト」や「S-PA」等の体験（注意や記憶の働き等の理解）	
講義	60	支援のアイデア：障害特性に基づいた支援2 1）コミュニケーション支援 2）小児期における支援 3）発達障害・認知症・精神疾患との共通点と相違点 4）長期経過（フォローアップとライフステージに応じた支援）	立石 廣瀬 上田 浦上
演習	120	障害特性の把握と対応（社会的行動障害（軽度）対応演習） 1）グループワーク（DVD視聴：障害特性の把握と対応方法のディスカッション） 2）対応方法演習（ロールプレイ） 3）グループワーク及び発表（対応方法の振り返りと支援計画検討）	
合計	360		

【2日目】

形式	時間（分）	内容	担当者
講義	90	家族支援 当事者・家族の気持ち 虐待防止法と身体拘束について（障害者虐待防止法の概要、データの説明） 権利擁護と成年後見制度等	
講義	30	地域資源の活用 機関連携	
講義	60	基本的な情報収集と記録等の共有（情報収集とアセスメントの基本） 1）情報収集とアセスメント 2）記録のまとめ方と情報共有	
演習	120	障害特性の把握と対応（手順書作成演習） 1）グループワーク（DVD視聴：障害特性の把握と対応方法のディスカッション） 2）手順書作成演習 3）グループワーク及び発表（対応方法の振り返りと支援計画検討）	
講義	60	実践報告 1）小児期の支援 2）小児期発症の成人例 3）成人期の発症例	
合計	360		

【1日目の目的】高次脳機能障害の個々の障害特性等について理解を深める。
【2日目の目的】生活の全体像をイメージし、少し幅広の観点から環境を含めた情報収集。
個別支援に関わる対応方法やマネジメントを学ぶ。

変更点：
1日目の演習となっていた「基本的な情報収集と記録などの共有（情報収集とアセスメントの基本）」につきましては、基礎研修の段階を考慮し、完全なる切り分けは難しいですが、1日目はどちらかといえば、個に着目、2日目は個と環境に着目し2日目に変更。本来なら、ロールプレイや事例提供を含め、個と環境の情報収集を図るところですが、基礎段階で双方を含めた演習は少し難しいと考え、講義形式に変更（講義内で考えさせるを含め）し、丁寧な解説をするようにしています。（ただ、演習として講義・ミニ演習の繰り返しもありかもしれません）
2日目の演習で、個のアセスメント部分と環境のアセスメント部分を、含め支援手法・環境設定、そのための対応方法を、120分とし、最後の、具体的な実践報告で総括的にまとめるイメージです。（氷山モデルは言葉を抜きました）

演習目的：講義で学んだ高次脳機能障害の特性等について、疑似体験をとおしてさらに理解を進める。障害当事者がどのような状態、気持ちになっているかを体験・理解する。いくつかの神経心理学的検査を行い、その検査の意味、結果から見えてくること等を体験と講義で知る。

演習目的：ロールプレイをとおして、実際に対応してみる。本人の言動と障害特性を関連付け支援できるか、また本人のストレングスや背景等（社会経験、人柄、趣味活動等）にも着目できるか。

講義目的：受傷・発症前の生活歴と自尊感情を理解する。それが関係性を築くことに繋がり、支援の成否に影響する。

講義目的：高次脳機能障害が生活上でどのように現れるかを分析し、対処方法を学ぶ。支援のプロセスや視点、生活支援の具体例について解説する。

講義目的：前段の講義で学んだ内容と関連し、記憶や注意、遂行機能障害のある高次脳機能障害者の生活自立や社会復帰を支援するために、実践的な手順書作成など代償手段活用の方法を学ぶ。

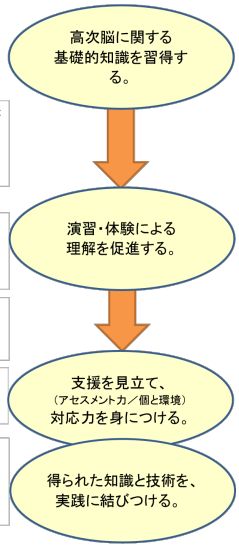

表 3 高次脳機能障害支援者養成応用（実践）研修カリキュラム＜案＞

高次脳機能障害支援者養成研修カリキュラム＜案＞

＜応用（実践）研修＞	◆対象：サービス管理責任者、相談支援専門員などの高次脳機能障害者支援の経験者等 ◆全体のねらい： ・多職種連携（チームアプローチ）の重要性を理解する。 ・高次脳機能障害者の支援の短期的な方向性（個別支援計画等）を立てることができるようになる。

科目名	時間	内容		説明
Ⅰ 講義	4			
1 高次脳機能障害者へのチーム支援	1.5	①高次脳機能障害支援の原則	チームアプローチの重要性 支援の6つの原則 地域で高次脳機能障害の人を支える	※支援コーディネーターの活用を含めたチーム作りについて触れる 「ピア（同じ高次脳機能障害者）による支援」についても触れる。
2 生活の組み立てと実践的な枠組み	1	②地域生活における支援の実際	地域生活における支援 職場における支援	
	1.5	③支援の実践的な枠組みと記録	支援の実践的な枠組み・プロセス アセスメント票と支援の手順書の理解 記録方法	
Ⅱ 演習	8			
1 障害特性の理解とアセスメント	2	①障害特性とアセスメント	障害特性の理解 障害特性に基づくアセスメント 行動の背景を理解する	※行動障害のある事例紹介も含む ※ロールプレイ ※（中途障害者のため）生活歴や社会経験等も把握する
2 環境調整による支援	2	②環境調整の考え方と方法	強みや好みを活かす視点 環境調整の考え方 環境調整の方法	自己理解の状況（自己意識性＋防衛機制）も踏まえたアセスメントが重要であることに触れる。
3 記録に基づく支援の評価	4	③記録の収集と分析	行動の記録の方法 記録の整理と分析 再アセスメントと手順書の修正 チームアプローチを学ぶ（個別支援計画作成演習） グループ討議／まとめ	基礎と実践では事例の難易度を変える。 ※支援コーディネーターとの連携を含めたチーム作りを含む。
合計	12			